

石川・田中遺跡

- 1 所在地 石川県羽咋郡富来町字田中
- 2 調査期間 一九八六年(昭61) 七月～八月
- 3 発掘機関 富来町教育委員会
- 4 調査担当者 平田天秋(石川県立埋蔵文化財センター)
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(七 尾)

田中遺跡の所在する羽咋郡富来町は、能登半島のほぼ中央部で西海岸(日本海)に面しており、古代においては能登国(越前、越中国と分離、併合)羽咋郡荒木郷に含まれていたと考えられている。

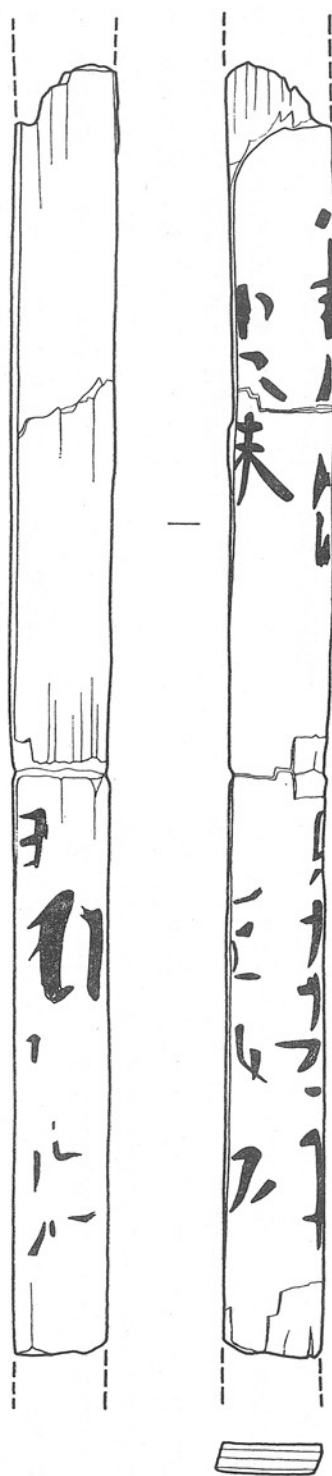
田中遺跡は、北方の切留集落の標高三〇〇m級の山塊を源とする富来川の下流、標高約一〇mを測る左岸段丘上の富来町字田中地区に所在している。この田中地

区は平地部と山間部との接点(出口)の部分にあたり、富来川がここで大きく蛇行している。本遺跡は、田中集落の東南約七〇〇mの地点、県道荒屋・富来線沿いに所在し、立地は北東方の山塊からの北西緩斜面にあたり富来川を望んでいる。

今回の調査は、「田中第二小規模排水対策特別事業」(団体営圃場整備事業とほぼ同じ)に伴う事前緊急調査として実施したものである。調査の性格上、限られた面積の発掘ではあったが、貴重な成果を得ることができ、遺跡の主要部分については盛土保存されることとなった。

調査の結果、遺跡の主要な範囲は東西一五〇m、南北一〇〇mと推定しているが、南北については県道の南側で範囲確認の調査を実施していないので確定できない。調査は、地下の掘削を伴う二本の排水路(幅二m×延長一〇〇mのトレンチ二本)に限定したため遺跡の全容はほとんど不明である。検出した遺構は、西側を画すると思われる大溝と性格不明の土坑、ピットが若干確認されたのみである。大溝の年代は、おおむね八世紀代に限られるようである。

出土遺物の大半は、大溝とその周辺からのものである。須恵器、土師器が大半を占めるが、木製品も多い。下駄、木槌、斎串、曲物底板、建築部材などである。その他には、和同開珎一点、馬の歯などがある。また、須恵器には漆、墨の付着したものも若干見受けられる。墨書土器は七点を数えるが、ほとんどが判読不能である。須



恵器底部に「八」（漆書）「西」「大」などが読みとれる。杯および杯蓋に磨滅、墨痕の見られるいわゆる転用硯も二、三点出土している。

今回の調査では、調査地点、調査面積も限られており、遺跡の全体像を描くことができる段階にはない。今後の調査を俟って検討したい。

8 木簡の釈文・内容

三片に折れている。法量は(211)×(16)×5である。表裏に墨書が

認められるが、判読は困難である。二行以上の墨書があったものと思われるが、何らかの意図で二次的に削られ切断されていると思われる。材質は杉である。木簡は、遺跡の西を限ると推定される大溝の溝底近くより出土しており、おおむね奈良時代のものであろう。

9 関係文献

富来町教育委員会『田中遺跡』（一九八八年）

（平田天秋）